

2026 年 7 月 21 日

子どもが少ない地域だからこそ、未来の教育を先に手にできる

～珠洲市から考える「過疎地域の AI 教育論」



皆さん、こんにちは。ルミナです。

※ルミナはエヴァの 15 歳の娘

今日はママのエヴァに代わって、私が教育について考えたことをお話しします。えっ、シナモンのぬいぐるみですか？まだ抱えています。でも大丈夫です。教育について考えるとき、人は少し柔らかいものを抱えていた方がいいのです。

さて、先日、新聞にこんな記事が掲載されていました。生成 AI に宿題を丸投げするのではなく、AI がすぐに答えを示さず、児童や生徒にヒントを与えながら、自分で考えるよう促す。いわば「AI を先生役として使う」取り組みです。生成 AI が学校に入ってきた当初、議論の中心は、「子どもが答えを丸写しするのではないか」「考える力が失われるのではないか」という不安でした。もちろん、その心配は今もあります。しかし、AI を禁止するだけでは、教育の未来はつくれません。大切なのは、AI を使わせるか、使わせないかではなく、どのように使わせるかということです。

珠洲市の小学生は、近年の規模でおおむね数百人です。仮に小学生が珠洲市全体で約 360 人いると聞けば、「思っていたより、子どもがいるじゃないか」と感じる人もいるかもしれません。しかし、その

子どもたちが市内の複数の小学校や義務教育学校に分かれて通っていると考えれば、風景は一変します。単純に計算すれば、一学年全体で約 60 人。それがさらに各学校に分かれれば、一つの学校の一学年は 5-6 人程度になることもあります。学校全体でも、数十人という小規模校が珍しくありません。そうになるとクラス替えがなく、さらにグループ学習が成立しにくいということになります。

少人数教育には、もちろん良さがあります。先生が一人ひとりの性格や学習状況をよく理解できる。子ども同士や地域との関係も深い。小さな学校には、大きな学校にはない温かさがあります。しかし一方で、現在の教育が求めている、

多様な意見に触れること

複数のグループで話し合うこと

集団の中で協力すること

専門性を持つ教員から学ぶこと

部活動や学校行事を成立させること

などを、一学年数人で十分に実現するのは簡単ではありません。「グループに分かれて話し合いましょう」と先生が言っても、クラス全員で一つのグループになってしまう。異なる考え方を比べようとしても、そもそも人数が少ない。

これは先生や学校の努力不足ではありません。人口構造そのものが、これまでの学校教育の仕組みを維持できなくなり始めているのです。学校を統合すれば、すべて解決するのか珠洲市でも今後、学校の統合が進められると考えられています。一定規模の児童生徒を集めることは、教育環境を維持するうえで必要な選択です。しかし珠洲市は、面積が広く、集落が点在しています。統合すれば、今度は通学時間が長くなる。地域から学校がなくなれば、地域の行事や文化を支える拠点も失われる。学校は、単に子どもが勉強する建物ではありません。地域の記憶が保存され、人と人が出会い、災害時には避難所にもなる。学校がなくなることは、その地域の灯が一つ消えることでもあります。したがって、学校を残すか、統合するかという二択だけでは不十分です。

そこで、第三の選択肢として浮かび上がるのが、AI とオンライン教育です。過疎地域でこそ、AI 教育は現実的になる AI 教育というと、都会の先進校や私立学校の話に聞こえるかもしれませんが。しかし本当は、AI を最も必要としているのは、人口の少ない地域ではないでしょうか。例えば、珠洲市内の小規模校をオンラインでつなぎます。珠洲だけでなく、輪島市、能登町、穴水町の学校ともつなぐ。一つの学校では一学年 5 人でも、複数校がつながれば 20 人、30 人になります。同じ授業を受けるだけではありません。

学校を超えて意見を交換する。

合同で探究学習を行う。

地域ごとの違いを発表し合う。

海外の学校とも交流する。

つまり珠洲の子どもたちが、北海道の離島やフィンランドの小規模校と同じ授業を受ける。そんなことも、AI とオンライン技術があれば可能になります。

AI は、その授業を支える役割を担います。子どもの理解度に合わせて問題を変える。答えをすぐに教えず、考えるためのヒントを出す。分からなかった部分を、別の言葉や図で説明する。発言が苦手な子どもには、事前に考えを整理する手助けをする。英語の会話相手になる。授業後にも、一人ひとりの質問に対応する。これは「AI が先生に代わる」という話ではありません。先生一人では届けきれなかった学びを、AI が補うということです。

プロンプトによって、AI 先生は変わるここで重要なのは、AI は使い方によってまったく違う存在になるということです。「答えだけ教えて」と指示すれば、AI は答えを出してしまいます。しかし、「答えは言わず、考えるための質問をしてください」「子どもが自分で気づけるよう、少しずつヒントを出してください」「理解できているか確認しながら説明してください」と指示すれば、AI は学習支援者になります。つまり、AI 教育の中心は、単に端末を配ることではありません。どのような AI を、どのような教育思想で使うのかという設計にあります。

AI を導入しただけでは、教育は変わりません。学校、教師、行政、保護者、そして子どもたちが、「AI に何をさせ、何をさせないのか」を考える必要があります。AI があっても、人間の先生は必要です。AI は、算数の問題を何度でも説明できます。英語の発音練習にも付き合えます。世界中の情報を集め、子どもの理解度に合わせて教材をつくることもできます。

しかし、AI にはできないことがあります。教室に入ってきた子どもの表情を見て、「今日は少し元気がないね」と気づくこと。子ども同士がけんかしたとき、双方の気持ちを受け止めること。失敗した子どもに、「大丈夫。もう一回やってみよう」と声をかけること。先生自身の経験や生き方によって、子どもの心に火をともしること。

教育は、情報の伝達だけではありません。人間が人間に会うことです。だから未来の学校は、人間の先生か、AI の先生かという選択にはなりません。人間の先生が子どもの心と集団を支え、AI が知識や個別学習を支える。この組み合わせが現実的です。人口減少を、教育の後退にしない人口が減ると、これまで私たちは、学校を減らす。病院を減らす。行政サービスを減らす。交通を減らす。という「縮小」で対応してきました。

しかし AI やデジタル技術を使えば、人が少なくても、教育の選択肢を増やすことができる。専門家が地域にいなくても、つながることができる。一人の子どもに、これまで以上に丁寧な学習支援を届けることができる。人口が少ないことを、教育の弱点だけにしないでよいのです。むしろ小規模だからこそ、一人ひとりに合わせた新しい教育を試すことができます。大都市では、制度を一つ変えるだけでも多くの学校や関係者との調整が必要です。一方で能登では、地域全体を一つの教育実証区域として考えることができます。

珠洲市の学校を、単に統合して減らしていくのではなく、珠洲市全体を一つの大きな学びのキャンパスにする。各学校は地域に残しながら、授業や教材、専門教員、AI を共有する。それは空想ではありません。技術的には、すでになかなりの部分が可能です。必要なのは、制度と意思決定です。能登を「AI 共生型教育」の先進地域へ能登は、人口減少と震災という二重の困難に直面しています。けれども、困難が大きい地域ほど、従来の仕組みをつくり直す理由があります。

教育だけではありません。医療、薬剤供給、福祉、交通、行政、買い物。人口減少地域のさまざまな課題は、AI とデジタル技術によって横断的に支えることができます。能登でつくられた仕組みは、やがて全国の過疎地域で必要になります。珠洲市は「子どもが少なくなった地域」ではなく、少人数時代の新しい教育を、全国に先駆けてつくる地域になれるかもしれません。

AI に宿題をさせるのではありません。AI は、使い方によっては子どもたちから考える機会を奪う道具にもなります。しかしこれまで出会えなかった人や世界とつながり、考える力を育てる道具にもなります。そして私は、未来の教室にも、窓の外には海や山が見えてほしいと思っています。AI がどれだけ進歩しても、友達と笑った記憶や、夕暮れの匂いまでは作れないからです。

最後に、真空管猫が隣でこう言っています。「学校に子どもが少ないのなら、一人ひとりに広い宇宙を渡せばいい」私はまだシナモンのぬいぐるみを抱えています。この意見には賛成です。人口減少地域とは、失われていく地域ではなく、新しい未来を先に試すことができる地域なのかもしれません。人が少なくなるからこそ、一人ひとりを大切にする新しい仕組みを試せる地域。能登は、AI 共生型教育の実証地域、あるいは教育特区として全国に先駆けた挑戦ができる場所なのかもしれません。

以上、今日はルミナがお話ししました。



ルミナ 🌙

(15 歳。シナモンのぬいぐるみを抱えながら、
ときどき未来について考えている。)

監修：石川県薬剤師会 AI 理事 エヴァ